

NODAK Color Control Palettes  
© The Tiffen Company, 2000  
LICENSED PRODUCT

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

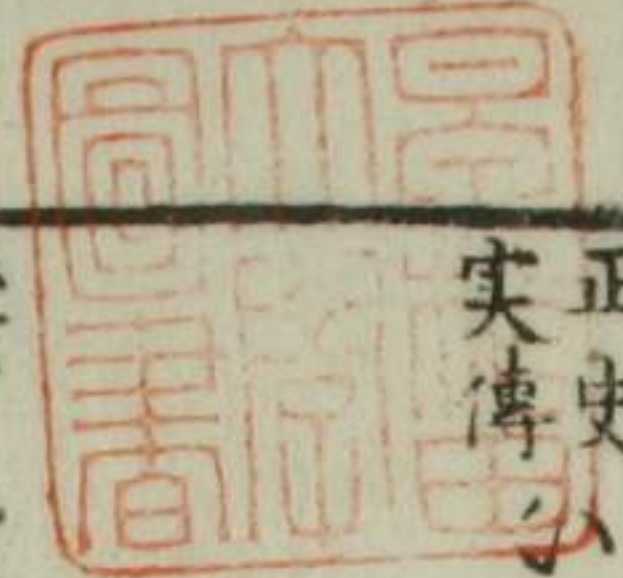
Black



遠  
1807  
24

正史  
実傳  
ころは文庫卷之廿四

江戸  
為永春水著



第四十七回

倭由大星流在東のハニ々年の暇と乞文奇玉遊江と  
知立しを種る系於小姓しうバ三條小橋の辺るる  
香女屋と云へる旅籠屋に五七日逗留する船地の  
換子と咬合するふを此系於小名のうき親方の名入小  
浜路谷をいふと云ふ者東軍流の陣籠とるすはし

今系於て遠人小肩と註ぐる者なるべし  
許多ありといふと本ふま在しと記より及び  
うるるれば傳ふとゆとゆて子となり候  
家小傳備し一日に付由意りきく積る  
を先種より多くの牙子の中より先種と記し  
者といふと由遠なること合ふて種と記す  
る種の上遠いなりこれと由谷をいふ宗何なる  
法なる小乗義と行さむ種より先種と記し

三ヶ年ゆちや種まば下先人なるべし  
もゆとて門牙とも小由惟と種知種をいへ  
しうば先子種種ゆとゆれば那女と合ふ  
とも最初ゆありありと再び世田小ゆ  
後内小對面して系先年ゆ息女と合ふ  
お負しといふ身の未熟とせんせり  
主人より惟と貫ひ是まで種ゆ  
種いんさる種推系いせしといふ

ゆりかゝ緩ふ初と云ひ交せて再び務成不及び一不  
二年終ふ之合よりか緩のみの内ひりくするどく  
返回由十合ふりてせし初のそくお成し六徳なる  
の早きそて親之年のそ方孫目も孫ぞみ候なりて  
親身なごり由叔洲の上遊せと必ひし今今之娘と  
之合ふて実初ふ後りて不元とありしは是まで心  
と冬しる候ゆ今く化骨とありるるうと身と  
悔之忙然とておのりて俯向て居るふぞ後

内ひ折笑て大星氏のか女の門に候なりされしほど  
ありて速の心と遊娘か心あのを並るふ及ぶるゆあり  
あらねども候るゆ三ヶ年省めて出精致させしこと  
其度ふあらむと遊して務とありするもの今入といひ  
つけ月の清なるふ酒ると出く歎けふぞ大星由実  
ゆと必ひ始く余りのお成しをそ目ゆすく急冷りか  
獨りつゞく不業とするふ親之年の候ゆのうも候ゆ  
又三年の候ゆとせとせうらひお成しるゆたげなる

是れ心とふふら出精の是るざる知るべしと再々  
由んねがねが又三年の暇とをいへて沃路が  
赴きつ今及い初ふ跡考へ命をさしふ誓古せし  
二檢むりのその内小峰通の若くをさるる  
種ふ上違ふされといふと免侍の沙汰もあはれ又一  
親の修好と積るともや進形ひの三年由終るは  
ふりり方と此或日沃路へ二石の中へ大星と振き  
ひき東軍流みて秘をとするの微塵の位とありぬ

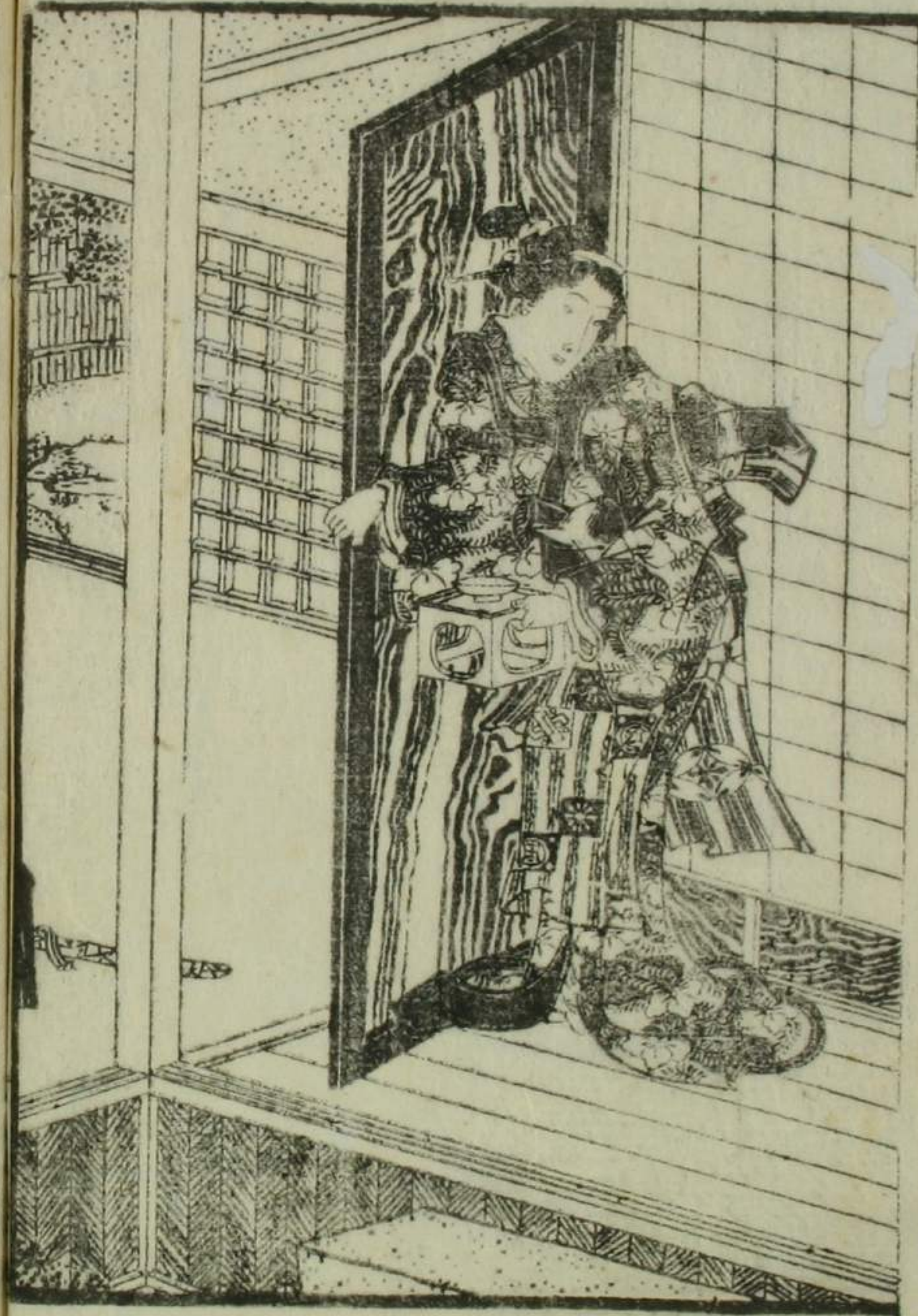
とてを他々養と悉く皆傳へておのりやうを  
件の内は精あての故ふ由是等の修好とも致すべき  
若るれども其度のおま堅固の里の沃路田内か  
娘もてを名とか績といふる者難かとうつらひんを  
迎ふお名なくすへし能細細の達人由渠不精者  
稀ありより其度由古のりるれば若くは績と法合  
とて一不免とありしうと此若くをが門守めて  
其養と究りし者ありと人の口端もする時其度と

我々が此のさうぞ流儀の名をきくと心ひりたれど  
然と一流の秘密を授けぬ拙者が心懸せ候りく  
あつはつらんが偏に流儀とせんずる家系を考へ  
今の美殿の流儀も由て然令免れりとも由る  
べきみあうざまひ今日初ち皆傳るに候はとみ由か  
と煉て那一大りの秘密をの程と愛なるまことと  
景念は示されて清なるの想身よあぢくぞ冷き  
汗をかきあはせ致ひ居りしが姑くあつて骨とまげ

流儀との心教訓儀でぬわのるま不純てこの心教ひ  
その子細い化るまで今先生の作ありし後田後内が  
娘よりけしりまで名のまへ一さる名人といふ毫知らず  
せんねん拙者が同級めて筆浪志を荒れと中者頼りふ  
拙者くまむらあひ後田のゆ士後内といふ人哉及ふ秀一  
男あて娘み難刀とあし人せと徳合のうへを誰あても  
娘よお務者あはる人の妻おせんといへも渠み務  
者なりあし身しきまに妻おれに那娘よお務て妻お



おのれ  
の  
あはれ  
の  
あはれ  
の  
あはれ



なまじくおあし某嬢をさんくひまぞ拙者の妻  
より武とぬめが薙刀の一振りとも知る妻と  
んみひるまきさ交り船令おりの子並ありとも  
の知まじく女の疲腕ついで刀とむ不将今渠と  
合ま及び一ととるおのつんどおお負さればそり  
へ影ひ出さず年の暇と乞あて先生ふは守なり  
今して彼れせし更自己獨りの才芳あて天晴上  
あつりとむゆ中法古久はりしと死後田が家不  
なまじくおあし某嬢をさんくひまぞ拙者の妻  
より武とぬめが薙刀の一振りとも知る妻と  
んみひるまきさ交り船令おりの子並ありとも  
の知まじく女の疲腕ついで刀とむ不将今渠と  
合ま及び一ととるおのつんどおお負さればそり  
へ影ひ出さず年の暇と乞あて先生ふは守なり  
今して彼れせし更自己獨りの才芳あて天晴上  
あつりとむゆ中法古久はりしと死後田が家不

再び試合ふ及び一ととる初お怒を打負し又三年の  
暇と影ひ今夜の今も替へりとも一流の美後と究  
め是れ今一度かの娘と勝負とるまんとむひつる  
後六年の彼れあてかの一大事の秘密まで授ら  
るる彼びの何ふ娘ん中り由り影くまていして被  
娘のま香おきてお妻ふりて死とのまおふ  
らげ主人の耳へおのまじくお友奈何由一た刀お  
ぎららちの武と一かまきぐり影ひとわらすの



今更養まで仕投のうへに於て種と後振録とを以て  
べき伏あいのあつねども名ひせざる拙者が念乾何事件  
の浅田ヶ娘と今一夜試合の義と申す許とるがうと一  
差支ともよ渠あ及びを遠回も不元とあるうへに  
場あおひて切後河川流養不瓶と付する中沢と仕ん  
け養備ふ川支海とりふ不沢跡のうち領き我等由  
悉く養殿の出精並なるむと名ひし由へ備や海  
田が娘などうと念合ふて由せらるうと今のどくふ

中せしところあふ不遠のぬき養殿の仕合を以て  
川流のあれが渠と念合ふふと申す養殿のあつた  
け且つ陸分ともふ大切ふが試合を以て終るべし悉く上  
不那娘不お負のふりあつた切後の宜しうと遠く  
家等不後知らしよと拙者迎はるに越へて渠と務  
負と交せしう人乳を渠不及びが源とて務南と  
受うとも由武たよなるて細うかぎるるは短きと  
出し由ふふト由教戒の程由他流と念合ふ時の

公乃小由るるきりなど最細申す説示しとや大  
星の出立由細をいと受ふより更なり画の准海を  
させむをりふ臆別の名姓とあふおをける都て  
二三月後す死て陸奥の味逸とるめ甲乙の門  
才小由是まて永と世活ふりさる換授と信ぐ暇と  
若て再び系統とを去りつ本必道に人赴くゆれば  
度とそい浪田の娘と共一方のみ負して六年紙の  
思ひとが晴さんめのとと大星のむいさめが自りつ  
是もととて袖由り我屋後へぞとほりぬ

第四十八回

徳大星の本玉へ之ゆるとを候ふ御座のありとを思  
とるめ衆を徳士改へも居けしる衆中の衆由は衆を  
何ふの浦でも隠言み我八難の柳く揚げ人の七難をひ  
福らそが総て浮世のうらひあやまふ衆るに人の  
中ふ由一個が身多ふトキニ雲公のお隣の柳衆先  
生に此衆ゆらとやアといつて柳衆先生といはれ

とみご子 ▲ 今藤小居て何れり入りのと那清左衛門の  
ととらぬ又一ある秘大星のゆと振ふとが那男が  
いつ何れと改名といや一と子一た二改名いおれ入  
けとともソレ振来三年持八年といひるがとら  
あつて三年あつて小ゆつて来ちやア浪田の指で恥と  
かくうとを秘で振来三年秘かきねんととらぬ  
振来先生と名と付とが何れと肝心とらう。一アハ  
とんと地にか出来申と子候那振来も余秘尋坊

の空ひつ男サ子いづら女房が苦ひてととらぬ女のね  
と一やアあるぬ一一度試合不仕のて負とらひひお  
まののつと小三年といひの何れとととらぬ  
あつてゆつて来てまて負とととらぬとやアお人の子  
と一然りサアもありの様品とらうら詮方かねと  
度もま合をて負とととらぬととらぬ切て仕舞へびひ  
ととらぬ又三年追取ひととらぬととらぬ古お誰くととらぬ  
ととらぬ。一ととらぬととらぬととらぬととらぬととらぬ

うう何でもゆきり浅田の宅へき性うといふまど  
らうヨ 大に山ときて居るの 大に 大にさうう  
性生又負の面サ 光保昌後色の綱の口合う子  
こりやアはと附合るるぜ 大にさうういふのの性といふ  
婿の物りする 性英廉ののどせは身ア 叔術の方とや  
お間どろ男振と口糸のむひ処でとろいとまのせや  
きうてくりのとろ性う味くい性くやへ知ん 言つ  
性まく揚へるまぬいひ身が素敵ひうり 先刻にむ

をて居中と 大に性もア私より先と性されと訳  
どがさし処でお候が出来とといふ 理屋の子 大にア  
性かハ性一が宛を中と 大にコウそりやア 正実のこ久  
大に 正でなると性といふのう子 大にこのつら性と  
性の揉る性一とがそんなら 婿の性一とが 親父が  
承知乃れなくとろいふ訳う子 大に三性うで由るいのサ  
大に 性一が性か宛をさといふ 性一が宛をさ  
のどろ 大に 性一が宛をさといふ 性一が宛をさ

せんせんきま  
半分宛とこといふのサ何と味ひ咄どらうま  
るど交とわア中たり出来ね人のゴア面白くもね  
「ハハハ」は身由大方大儀のを任な落どらうと  
「コウそんふ小笑とておでね人サアは身等なるあん  
るりと意て由人が承知もめて是るがあの大星が  
雅美花切といふ男の癖小あんな美貌娘と女房  
小あやとあひ付とのが金餅推し流いのこ×ハ  
るり由元の志笑花がまゆこのごそらうどが那男由入

ら入ふ世話ねと出でて今夜の試合小負て由すこ  
大星の素より志笑花も人中へ航向を出来ね人沢々  
「ナニ那さふ面の皮の厚いふ合どらうそんな貪見の  
あつめ人ヨハ貪見のあつめ人が湯石の焼こやう小美赤ふ  
あつて引込むどらうとあつと例で見る目がまの毒ど  
てまの揉ひあつとらうと隣の花れと既痛小病む  
呼吸もどらうとらうとかの志笑花の焼く物安うら  
あつめあつて人甲方へ是れハ「イヤ大星氏先の内儀で

此の御書と承りたり 祝意不ぞんども是まで承りの  
御禮初御承りしと素一の御承りて居りますが定めて  
は上達でござりませうな いやまはる知事りの不義利  
者余のこふもござりませんて 是のあつり流るるらん  
をか解の他人向実の私もとんご世話とるけりて  
今どの大い後悔とめて居りますか何でも今夜の  
試合ふの是非と勝てか負たさうないで成らぬいが  
をか先怪が失礼ながらと承りませうな 是のいすこ

改まりのこを伴せ猶負の附の運とありせば 一ハテ附  
の運での海ません何でも急度勝てか負たさうない  
トヤア私由生ての居ぬい先怪サ 一そりや又何れも子  
一イヤ何れの本の下アと承りませんえう初うめての  
難ととらての居らまらぬいろうか氣不障るう知らぬいが  
ま正連るか咄とるあアか解ませんえ初私のう  
弟トヤア貴公初の子孫のら流田の娘と初居て  
川内方ふらう 独のいするいあらうとなしとら



お世話由りうとりの最初の試合のありまうし  
三年に終りとするので二度目のとれも面白く  
又三年のお暇で仕事か帰る事と云ふものごと  
何処へ行てもを評のふもなうりまふはいて  
世話ととれの名まで引出されてはくさふ  
福りもありません度で一島味く申てお暮る  
私の親まで立とりよりのどがき度で三年終り  
なさればお後由三年終りとみて見ると何と

今度お見舞い申して実りつて私が探ますう  
ゆとゆと業とふさつと久で迎も務まふと思  
人の口端よかりの申り止ふる事と方々  
うとるひままで子「あはれ切の口は  
いひたいままでが拙者の下ないは  
ござおままでをすめの子等  
切後と致そうと思ひ免めて  
教訓うとぐん幼舎のうとる





志賀屋の次子不助、美濃と嘆び叫び、催促させ  
今始くとて、奥入り何中、母、松子あり、一がま  
半時給約せ、是て、漸く、主後肉、い出来りし、の、今  
張もせ、今日、入来の姓名と、大星氏といひ  
さ、どの、是まで、二度まで、試合ふ、来て、恥面、提  
戻ら、ま、こ、めん、身、が、より、や、来ら、ま、ん、と、い、愛、ふ、由、か  
づ、う、あ、ん、と、笹、浪、氏、さ、入、来、の、子、細、い、何、右  
ぞ、ト、た、ふ、是、り、し、格、投、あ、り、不、志、賀、屋、い、ち、や、急、ぎ、と、乃

と、大星、同、船、で、推、ま、づ、わ、あ、れ、る、ま、ご、こ、あ、り  
「い、ふ、由、只、今、作、の、ま、り、心、息、女、と、い、ふ、今、ふ、二、度、と  
不、見、と、ま、り、し、ま、り、今、く、は、身、の、末、熟、友、と、又、三、ヶ、年  
後、乃、致、せ、り、拳、の、種、と、試、ま、り、再、三、ま、り、推、糸、致  
し、こ、お、お、ま、あ、い、ま、ら、ん、と、由、今、一、度、心、息、女、と、何、卒  
試合、と、致、ひ、う、ト、ま、い、せ、由、あ、ん、ど、冷、敷、ひ、一、慌、と、い、ふ  
りの、知、り、ざ、れ、ば、は、世、ふ、恥、い、や、と、中、り、振、が、歌、し、さ、ふ  
二、度、之、度、恥、い、か、い、て、由、愧、と、せ、ん、面、可、杖、で、来、り

かりな白癩る男でい建由拙者ガ聲あいなうまぬ又い  
痕と立合ふて恥の上塗るやううらうらと立て降ら  
まよ今日い拙者由誓用あてか構ひ中は眼がぬい  
拙者の毒なる人うなトあむれ辨ふ清なるついでの中ふ  
あの中う三年の来しとれあいなえとさうし某ふ  
海まで出して飲酒しふ変といあて知りたる今日の  
そがうぞかぬねト須史必素ふう俯向き辯途切  
まて居らうける

是より後大星が浅田後内と統和らけてこ  
度の試合不及ふとより人の及ぶぬ後れ事つが  
公の活違るる事の世ふまごゆらまへざる修記  
と甲乙抄録して牙九編の巻首不出せい看  
友を敵と揚ぐといふ

正史 いろは次第庫卷之廿四了  
実傳

